

取した。さらに化学療法開始前、末梢白血球数が最低となった時点及びその後末梢白血球数が最も高値を呈した時点での関連を検討した。その結果、観察期間中に41.9%の被験者に口腔粘膜炎が発生した。口腔粘膜炎が発生した者では、しなかった者に比べてベースラインの50%以上に回復するまでの日数(50%回復日数)が有意に多かった。これらより、唾液中白血球量の測定は化学療法中の患者における晩期の口腔粘膜炎発症予測に有用であることが示された。

その後の研究では、口腔粘膜炎発症の微生物学的要因と考えられる口腔カンジダの抗がん剤投与前後の量的測定が口腔粘膜炎の発症予測に有用かを検討した。化学療法開始前に歯科へ周術期口腔管理を依頼された125名を対象とし、抗がん剤投与前と投与後の口腔粘膜の状態と口腔カンジダ量を測定した。カンジダ量は抗がん剤投与後に有意に増加し、抗がん剤投与前の段階と口腔粘膜スコアで有意な関連が認められたが、抗がん剤投与後と口腔粘膜スコアはさらに有意に強い関連を認めた。論文で報告した唾液白血球の回復は、化学療法後半で重度口腔粘膜炎の発症を予測したが、カンジダ量は比較的早期の粘膜炎発症を予測しうることが示唆された。

2. 下顎骨病的骨折を呈する10例の患者の臨床報告

Clinical study of pathological mandibular fractures in our department

○小松 祐子, 川井 忠, 大橋 祐生,
古城 慎太郎, 山谷 元気, 角田 直子,
宮本 郁也, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座
口腔外科学分野

【目的】 下顎骨病的骨折を有する患者の臨床情報を把握することを目的にした。

【対象および方法】 本研究は症例集積研究である。2015年1月から2019年12月までの5年間に当科を受診し、下顎骨骨折と診断された症例を診療録と画像検査所見から抽出した。これ

らの症例のうち、病的骨折と臨床的に診断されたのを対象とした。さらに、病的骨折の症例について、初診時の原疾患、発症時期、骨折時の年齢、性別、骨折部位、発症誘因、治療法および治療成績を調査した。

【結果】 5年間で下顎骨病的骨折と診断された症例は10例であった。原疾患は悪性腫瘍が5例、放射線性骨髄炎および顎骨壊死が2例、嚢胞が2例、良性腫瘍が1例であった。悪性腫瘍の5例は初診時から病的骨折を認めていたのが1例、外科療法中と外科療法後に病的骨折を認めたのが各々2例であった。放射線性骨髄炎の2例は40 Gy以上の放射線照射が行われていた。嚢胞の2例は埋伏智歯を伴う含菌性嚢胞であり、外科療法中に骨折を認めた。良性腫瘍の症例は初回手術後の顎骨欠損が大きく、二期再建の待機中であった。上記10例のうち外科療法が選択されたのは2例、保存療法が選択されたのは5例であり、他3例は病的骨折に対する治療が不要であった。治療対象の7例において、治療方法によらず発症後1年以内に「軽快」と評価されたのは4例、「不変」と評価されたものが2例、転院となったため「評価困難」であったものが1例であった。

【考察】 本研究は少数例の症例集積研究ではあるが、咬合偏位を認めた症例において保存療法が奏功しなかった。したがって、今後同様な症例に対しては外科療法の選択に関して慎重に検討する必要があると考えられた。

3. 岩手医科大学附属歯科医療センター義歯外来における3ユニットブリッジの予後に関する10年間の後ろ向きコホート研究

10-year retrospective study of 3-unit fixed dental prosthesis in denture outpatient department, Iwate Medical University Dental Center

○齊藤 裕美子

岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座 補綴・インプラント学分野

目的: 岩手医科大学附属歯科医療センター義歯外来における過去の3ユニットブリッジを対象